

資本主義一般の 理論と独占資本主義の理論 (1)

——方法論上の諸問題——

鈴木 健

1. 資本主義一般の理論と発展諸段階の理論
 - (1) 事物の「有機性」と「発展」を捉える科学的な方法
 - ① 「有機性」と「発展」の原理としての概念
 - ② 概念のモメントとしての普遍・特殊・個別
 - (2) 資本主義一般の理論と発展諸段階の理論
 - ① 資本主義一般と発展諸段階
 - ② 資本主義一般と独占資本主義の関係
 - (3) 資本主義一般と発展諸段階の関係についての諸説批判
 - ① 資本主義一般と「抽象的普遍」
 - ② 自由競争資本主義と資本主義一般の理論
 - ③ 「競争と独占」の区別と同一 (以上 本号)
2. 『資本論』と『帝国主義論』 (以下 次号)
 - (1) 『資本論』と『帝国主義論』の継承・発展関係
 - (2) 『帝国主義論』と現代帝国主義の諸理論

は じ め に

競争と独占，資本一般と金融資本，資本主義一般と独占資本主義，等々，資本主義一般と発展諸段階の区別と同一に関する諸問題はもとより，資本（＝金融資本）と国家，「国民経済」と国際経済・世界経済，等々，資本制生産の構造に係わる諸問題を理論的に解明しておくことは，現代資本主義の諸現象を法則的に把握するための理論的前提である。

この点に関して，現代資本主義研究の分野には，表裏をなす二つの理論的

傾向がある。独占資本主義の理論の媒介を欠いた抽象的な資本主義一般の理論によって直接的に現代資本主義を捉えようとする議論と、資本主義一般の理論の根拠づけを欠いた発展「段階」の理論によって現代資本主義の諸現象を捉えようとする議論である。

現代資本主義論の領域に見られる、このような二つの理論的傾向は、直接的には、新たに出現する経済現象を、既知の経済法則によって根拠づけるという観点を放棄する議論と、逆に、既知の経済法則を機械的に固執して、その具体的な展開を放棄し、そうすることによって、新しい経済現象の法則的把握を、事実上、放棄する議論という形態をとっているが、表裏をなす、これら二つの理論的傾向に共通するのは¹⁾、資本主義一般の理論と発展諸段階の理論ないし独占資本主義の理論の区別と同一に関する認識が欠落するという理論的欠陥であり、より普遍的に言うなら、普遍と特殊の区別と同一に関する認識の欠落ということである。

資本制生産は、一つの有機的全体であり、自己を自ら発展諸段階へと規定する具体的普遍・主体なのだから、このような具体的普遍としての資本制生産を把握するのに、認識論上の基礎である普遍と特殊の弁証法的同一についての認識を欠落させるということは、それ自体奇妙なことなのだが、それが実態なのである。現代資本主義論の最大の欠陥は、方法論的には、この点にあると考えられる。

小論では、以上のような問題意識のもとに、現代資本主義論の理論的核心をなす、資本主義一般の理論と独占資本主義の理論の論理的関係について、主として、方法論的な見地から検討してみたい。

1) 独占段階の理論による媒介を欠落させるということは、資本主義一般の理論によって現代資本主義の一切の関係を根拠づけようとするものであるが、それは一方で現代資本主義の特殊性を「一般」に解消することによって、その多様な関係を看過するものであり、他方で、資本主義一般の理論を、単なる抽象的普遍・共通性にとどめ、現代資本主義にたいして外的、偶然的な関係しかもたない無力な抽象に引き下げるということである。他方、「一般理論」を欠落させる「段階」論によって現代資本主義を根拠づけようとするのが、そもそも初めから、法則的な把握を放棄するものであることは言うまでもない。

1. 資本主義一般の理論と発展諸段階の理論

(1) 事物の「有機性」と「発展」を捉える科学的な方法

① 「有機性」と「発展」の原理としての概念

現代資本主義論の課題は現代資本主義に貫徹する経済法則の形態を発見すること、言い換えれば、現代資本主義の諸関係を資本主義の経済法則の一つの特殊な形態として把握することにあるが、そのような法則的連関は個別の現象の分析を集積することによって自然と滲み出てくるというものではない。個別的な事態そのものは、いずれも普遍的なものの特殊な形態として存在するのだけれども、これら個別的なものの分析によってただちに普遍的なものを発見し、当の個別的なものをこの普遍的なものの一つの特殊な形態として認識しうるというものではない。個別的なものを普遍的なものの一つの特殊な形態として把握するには、普遍的なものそれ自体についての認識、すなわち、普遍と特殊の区別と同一に関する弁証法的な認識が前提とならなければならない。現代資本主義研究における方法論上の問題としては、この点が特に重要である。資本制的生産のような、それ自体一つの有機的全体を成して運動し、自ら特殊な諸段階へと自己を展開する具体的普遍を認識するには、事物の「有機性」と「発展」の原理としての「概念」についての認識、すなわち概念のモメントとしての普遍・特殊・個別の区別と同一に関する理解が前提となるからである。

資本制的生産は、一つの有機的全体として自己関係し、自己矛盾を原理として発展する具体的普遍である。その変化は、具体的普遍から具体的普遍へであって、それ以外に在り様はない。資本制的生産は、いかなる発展段階にあっても、一つの具体的普遍・具体的全体としてしか存在しないのだから、それは、一つの歴史的存在としての自由競争資本主義か他の歴史的存在としての独占資本主義か、前者から後者への歴史的過程としてしか存在しない。現代資本主義の法則的連関を規定する資本主義一般は、それ自体として歴史的に存在するわけではないし、独占資本主義もそれ自体として歴史的に定在

するわけではない。存在するのは、歴史的に規定される自由競争資本主義と独占資本主義であって、資本主義一般とは、かかる歴史的規定性をまとってのみ実在性をもつのである²⁾。

この客観的現実を思惟がとらえる仕方は、歴史過程の単なる模写ではない。一つの有機的全体として自己を再生産し、発展諸段階へと自己を規定する具体的普遍としての資本制的生産を思惟においてとらえるには、なによりも、その有機性・有機的統一の原理であり、自己発展の原理でもある、資本の概念が把握されねばならない。それは、資本制生産の諸他のモメントを一つの全体として統一にもたらし、資本制的生産の再生産の原理となるモメントであるとともに、それを制約する諸他の特殊的モメントとの矛盾によって資本制的生産を発展諸段階へと規定する原理でもある。資本概念を原理とする一つの有機的全体、自己発展する具体的普遍として把握される資本制生産についての認識の体系こそ、資本主義一般の理論にはかならない。資本主義一般の理論は、その特定の発展段階の理論としては、独占資本主義の理論として特殊化されるのだから、資本主義一般の理論と独占資本主義の理論の総体が、真の意味では、資本主義一般の理論だということになる。

かくして、現代資本主義把握の理論的基礎をなす資本主義一般の理論と独占資本主義の理論との関係把握において、その方法論上の核心をなすのは有機性と発展の原理としての概念、そのモメントとしての普遍・特殊・個別の区別と同一についての認識である。ヘーゲル『論理学』において、ほぼ全面的にその輪郭を描かれた「概念」の弁証法を唯物論的な基礎の上につくりかえるということについては、すでに見田石介氏や鈴木茂氏によるすぐれた研究の成果があるので、ここでは、鈴木茂氏の見解を少しく敷衍しておくことにする。

事物の有機性と自己発展の原理としての「概念」について、鈴木茂氏は次のように述べている。「ヘーゲルのいう概念とは、あらゆる事物の本性をな

2) 普遍の「実在性」をめぐる实在論と唯名論との「普遍論争」に関しては、『見田石介ヘーゲル大論理学研究②』115～116ページを参照。

す有機性と発展性、いわばそのものの生命をさし」、また、「それをあらわすかぎりでの思考の様式」である³⁾。たとえば、植物の「胚はそのうちに植物全体の諸要素を含む、もっとも単純なそれらの有機的統一」であり、「植物の成長とは、そうした有機的統一」としての胚から、「根や茎や葉などの諸要素から成る、おなじくそれらの有機的統一としての植物全体への発展」であるから、「胚と植物全体」は、「単純なものと複雑なもの、潜在的なものと顕在的なもの、という区別がある」が、「前者から後者への発展が有機的統一から有機的統一への発展であることにかわり」はない³⁾。したがって、「有機性と発展性とは、同一の事態を構造的ないし歴史的にみた二様の表現」であり、「この二様に示される同一の事態こそ、すべての事物の真相をなす、その生命すなわち概念」である³⁾。

このようなものとして把握される「概念」は、形式論理学のとらえる「概念」とは全く異なる。形式論理学の「概念」は有機性や発展性を捉えることではない。なぜなら、それは、「多様な特殊なものからその特殊性を捨象してえられる、たんに思考のうえでの共通なもの、あるいは一般的な表象」にすぎないからである。たんなる抽象的概念としての「植物一般は、特殊な諸要素からなる特定の植物をなんら示すものではない」。というのも、かかる抽象的な「植物一般」とは、特殊な諸規定を捨象してえられる規定なのだから、「そこから具体的な植物を導きだせるものではない」、「そうした抽象的な普遍概念と現実の事物とのあいだには、もともとなんの必然的な関係も無い」。形式論理的な概念は事物の生命を捉える胚の概念ではないのである。それゆえにまた、形式論理学は抽象的概念を種差によって普遍と特殊と個別に分類して内包・外延関係を考察するが、それは、ヘーゲルの見地からすれば、抽象的普遍にすぎない。ヘーゲルの概念は、そのうちに特殊や個別のモメントを内包する具体的普遍、胚の概念である。普遍と特殊と個別は概念のモメントとして捉えられる⁴⁾。

3) 鯉坂、有尾、鈴木編『ヘーゲル論理学入門』(有斐閣1978年) 119 ページ。

4) 同上、120～121ページ。

② 概念のモメントとしての普遍・特殊・個別

事物の有機性と発展を、その原理としての概念によって把握するという方法論上の見地は、弁証法的発展法則についてのヘーゲルの発見に多くをおっている。ヘーゲルは、概念のモメントとしての普遍・特殊・個別を、形式論理的、悟性的理解から根本的に転換したけれども、現実の過程と思惟の過程を同一視するヘーゲルにあっては、事物の有機性と発展の原理としての普遍と特殊の同一性が、それをとらえる思惟規定としての普遍と特殊の同一性とたえず混同されることになる。

普遍と特殊の弁証法的同一にかんするヘーゲルの理論的な達成を、現実の過程と思惟の過程との明確な区別によって、一方で現実の過程を規定する原理として位置づけるとともに、他方で、この現実の過程を精神的に再生産する思惟の基礎的カテゴリーとして位置づけなおし、それを経済学の方法として確立したのがマルクスである。普遍と特殊の区別と同一の原理は、マルクスによって、経済学の方法として意識的に適用され、それによって資本制的生産の有機性と自己発展が法則的に把握されることになった⁵⁾。

普遍と特殊の弁証法的同一の理解が、事物の有機性と自己発展をとらえる思惟の基礎的範疇だということの意味をどのように理解すべきか。ヘーゲル『論理学』とマルクス『資本論』との論理的な関係を分析し、普遍と特殊の弁証法的同一のもつ方法論上の意義を発見したのは、見田石介氏である。

普遍と特殊の区別と同一についての弁証法的な理解を、経済学の方法として位置づけなおす見田氏は、それを資本制的生産の発展諸段階についての科学的な認識のなかに具体化している。資本主義一般の理論と発展諸段階の理論の関係についての、見田氏の見解がそれである。この問題をめぐって展開される見田氏の見解は、資本主義一般と発展諸段階との関係に係わって提起される諸問題、たとえば、競争と独占、資本主義一般と独占資本主義、資本概念とその定在諸形態、資本一般と金融資本、そして『資本論』と『帝国主

5) マルクスによる「ヘーゲル的方法の本質的性格」に対する批判については、『聖家族』のなかの「思弁的構成の秘密」(『マルクス・エンゲルス全集』第二巻)を参照されたい。

義論』との関係、等々を考える場合の、原理的、一般的な方法を確立するものとなっている。

見田氏がヘーゲル『論理学』とマルクス『資本論』との論理的な関係を分析して明らかにしたのは、次のようなことである。

事物を有機的全体として捉え、自己発展する主体・具体的普遍として捉えるヘーゲルにとって、なによりも、形式論理的、悟性的な思惟の原理は止揚されるべき対象にすぎない。悟性的方法（＝分析的方法、総合的方法）では事物の必然性を把握することはできないからである。ヘーゲルは分析的方法の二つの形態をとりあげてその制限性を批判する。「一方は区別を孤立化してそれに抽象的普遍の形態を与える場合と、他方はそうしないでそれを全体としてとりあつかってその類、実体に還元する場合」である。「ヘーゲルによれば、これらいずれの場合にしろ、分析的方法は、その対象をそこに与えられたままに受け取って出発して、それ以上、いかにしてなぜ対象がそこに、そうした姿であるのかということをしる問題にしないということ、およびそれは与えられた特殊なものを捨象することで得られた、少しも特殊と連関をもたない「形式的同一性」としての普遍であることを特性としている」⁶⁾。すなわち、「分析的方法は、自分の目前に見いだされたもの、それは一つの特異なものであるが、それを分析して普遍に還元する。これは一見すると、与えられたものを越えてそれを批判的にみることにようにみえるが、じつはその普遍は、すこしもその内部に特殊を含蓄していないから、その特異なものを説明するのに、その普遍に、外部から特異的な種差をくわえるというやり方でおこなうほかなく、対象そのものは依然としてそこに与えられ、見いだされたものに止まっており、その必然性はすこしも説明されていない」⁷⁾ というのである。

このような制限性をもつ分析的方法においては、普遍・特殊の関係も外的

6) 「ヘーゲル論理学と『資本論』」(『見田石介著作集』第一巻、大月書店、1976年) 126～127ページ。

7) 同上、127～128ページ。

で偶然的な関係として把握されているにすぎない。ヘーゲルによれば、「分析的方法では、普遍と特殊とがたがいに外的・偶然적である」のであるが、そうだとすれば、「特殊と特殊もたがいに外的・偶然的な関係におかれてい」ということになる。「このことは、すなわち、時間的に見れば、一つの事物にはさまざまな特殊な発展段階があるが、それらがたがいに必然的な関連におかれていることがつかめないし、また同時的に見れば、有機的な事物のさまざまな特殊的な側面がたがいに必然的に連関しあっていることがつかめないこと、つまり事物の発展や有機性をつかめない」⁸⁾ ということである。

かくして、見田氏によれば、現実の発展段階に照応する方法（＝真に科学の方法）は、普遍・特殊・個別に対する新しい見方・考え方を必要とするのであり、ヘーゲルこそ、それをまず成し遂げた当の人である。「特殊は普遍に、個別はさらに特殊に、それぞれ外部から規定を加えることによってつくられ、したがって普遍は特殊よりも、特殊は個別よりもいっそう外延が大きい」という形式論理的、悟性的な意味での、普遍・特殊・個別についての考え方を根本的に転換することが必要なのであり⁹⁾、外延が拡大すると内包が希薄化するという仕方では、普遍・特殊・個別の関連を捉えることのできない形式論理的な範疇理解では、「発展とか有機性ということ」を捉えることはできないということなのである。

概念のモメントとしての普遍・特殊・個別の弁証法的同一に関する、ヘーゲルの基本的な見地は、次のように示される。「概念そのものは、次の三つのモメントを含んでいる。(1)普遍 (Allgemeinheit)―これはその規定態のうちにながらも自分自身との自由な相等性である。(2)特殊 (Besonderheit)―これは、そのうちで普遍が曇りなく自分自身に等しい姿を保っている規定態である。(3)個 (Einzelheit)―これは、普遍および特殊の規定態の自己反省である。そしてこうした自己との否定的統一は、即自且対自的に規定されたものであるとともに同時に自己同一なものあるいは普遍的なもので

8) 同上, 128 ページ。

9) 同上, 132 ページ。

ある」¹⁰⁾。

普遍と特殊の関係については、こうも言われる。「普遍が自分を規定するのであって、その意味で普遍そのものが特殊である。規定性は普遍そのものの区別である。すなわち普遍はただ自分自身と区別されるにすぎない。したがって普遍の各々の種は、(a)普遍そのものであり、また(b)特殊である。概念としての普遍は普遍自身であるとともに、またその反対者であるが、この反対者はまた再び普遍の措定された規定性としての普遍そのものである。普遍は反対者にまで進出するが、しかし反対者のなかにあって自分の許にある。この意味で普遍はその差異性の全体であり、原理であって、差異性は全くただ普遍そのものによって規定されている」¹¹⁾。

ヘーゲルによって、このように規定される普遍・特殊・個別の区別と同一の理解を前提として、見田氏は、概念のモメントとしてのこれら普遍と特殊と個別の間の区別と同一を、五つの側面から具体的に解明し、それこそ、事物の有機性と自己発展をとらえる概念的把握の核心としてマルクスにも継承されていることを解明している。普遍・特殊・個別の弁証法的同一の第一の意味は、「方法の出発点となる普遍的なものは、それ自身のうちに特殊なものを内包している」ところの「具体的普遍」であり、「それは一つの矛盾物として前進の衝動をもっている」¹²⁾ ということである。後の議論との関連で言えば、資本の一般的概念は資本制的生産様式の一切の特殊な諸形態・関係を含むものとして一つの矛盾物であり、「そこでそこから、すこしも外部からの力によって規定されることなく、それらすべてが必然的に導き出される」ということである。

普遍・特殊・個別の弁証法的同一の第二の意味は、「普遍はじつは具体的で、それ自身のうちに特殊なものを内包しているというだけでなく」、「普遍はそのまま同時に特殊である」¹³⁾、すなわち、「無規定のものも規定的なもの

10) ヘーゲル『小論理学』下(岩波書店), 127ページ。

11) ヘーゲル『大論理学』下(岩波書店), 46～47ページ。

12) 見田石介, 前掲書, 137 ページ。

13) 同上, 138 ページ。

に対立させて見れば、一つの規定的なものである」、あるいは、「普遍は観念的な普遍であるとともに他の特殊とならぶ一つの現実的な特殊である」ということである。というのも、「発展」とは、普遍と特殊のかかる弁証法的同一なしにはあり得ないことだからである。「もし普遍的なものが同時に特殊的でないなら、たとえば商品が普遍的でありながら同時に特殊的でないなら、どうして商品が貨幣に転化し発展することが可能であろうか。商品が貨幣に発展するということは、商品が過程の第一の段階、貨幣がその第二の段階ということ、二つはともにそうした特殊だということではないか。……、それなら……ともにただの特殊でいいのではないかと考えられるかもしれないが、しかし、普遍的なものが、一つの新しい規定を加えられて特殊化することだけが発展なのであって、たんに特殊的なものが特殊的なものになるのでは発展でもなんでもなく、それがもし発展であるなら、その一方は他方に還元されて、それが特殊であって同時に普遍であるからのことにほかならない。だから、普遍が同時に特殊であるということは、発展の原理であり、発展そのもののことである」¹⁴⁾。見田氏が、ここで強調する、「発展」とは「普遍の特殊化」である、という見解こそ、資本主義一般と独占資本主義の関係を捉える場合に堅持されるべき発展観でなければならない。資本一般の概念は、産業資本、商業資本、利子生み資本を包括する「普遍的な概念であるが」、単なる資本の共通性ではなく、「同時にそれらの特殊的な資本のうちのひとつ、産業資本の概念であるにすぎない」という関係、あるいは、資本一般の概念は、「自由競争段階および独占段階の二つに共通に妥当する普遍概念であるが、同時にたんに特殊的な自由競争段階の概念であるにすぎない」という関係である。

つづいて、普遍・特殊・個別の弁証法的同一の第三の意味は、「特殊は普遍であると同時に特殊である」という関係である。「普遍から特殊が生まれるが、この特殊は、普遍的なものになにか外部から規定を加えられてできた

14) 同上、139 ページ。

ものではなく、普遍が潜在的にそうであったものが現実になつたにすぎないから、それは同時に普遍である」¹⁵⁾ ということである。

普遍・特殊・個別の弁証法的同一の第四の意味は、「普遍は特殊であり、特殊は普遍であるから、最初の普遍は、第二、第三の特殊な段階に転化しても、同じくそれ自身であることに変わりはない」ということである。「自らを特殊化しての特殊性のなかで自己同一性を保っているような動く普遍が、特殊の全体と等しい」ということ、これがヘーゲルの言う主体 (Subjekt), 個別である¹⁶⁾が、概念とは、具体的普遍としての主体そのものなのである。

普遍・特殊・個別の弁証法的同一の第五の意味は、「普遍と特殊の同一性なしには、事物の有機性がかめない」ということである。資本制的生産の発展過程に即して言うなら、こうである。「資本一般でもある産業資本は、自分自身から、その対立物である商業資本、利子生み資本、などの特殊な資本を反発しながら、それらすべてとともに引き続いて存続し、それらと併存し、そこに自分の脚で立った一つの有機的総体としての資本制的生産様式が成立する。この有機的総体がまたヘーゲルの言う主体であり個別であるが、これが個別であるのは、ここでさまざまな特殊なものが、たんに相互に反省しあって、制約しあい作用しあっているというだけでなく、そのうちの一つの産業資本は、そのように反省しあう特殊のひとつであると同時に、それらを自分の胎内から生み出し、……、それらに意味を与えるものとして同時に普遍としての意義をもっているからにはほかならない」¹⁷⁾。この関係は、普遍と特殊の同一性についての見地なしには把握し得ない。

(2) 資本主義一般の理論と発展諸段階の理論

① 資本主義一般と発展諸段階

普遍・特殊・個別の区別と同一、これを方法論上の前提としてのみ、現代資本主義の理論的諸問題を科学的に把握することが可能となる。競争と独占

15) 同上, 140 ページ。

16) 同上, 140 ページ。

17) 同上, 142 ページ。

・独占体制，資本一般と「独占」資本・金融資本，資本概念と金融資本概念，資本主義一般と独占資本主義，資本制的生産の発展諸「段階」，等々，独占資本主義「段階」としての現代資本主義を把握する基礎的カテゴリー，さらには，経済的土台と上部構造の関係と独占資本主義段階で貫徹するその形態，そして，種々の国家間関係によって媒介される金融資本の世界的な展開の諸形態についての認識も，普遍と特殊の弁証法的な同一についての理解を前提としてのみ真に十全なものとなる。

普遍と特殊の区別と同一の弁証法的な関係を唯物論的な基礎のうえに捉え直した見田氏は，資本主義一般と発展諸段階＝独占資本主義の関係についても，基本的な見地をすでに展開している。

見田氏は，「『資本論』で基礎を与えられた資本の一般的理論と同じく『帝国主義論』でその基礎を与えられたその帝国主義段階の理論，この二つの理論のあいだの論理的関係はどのようなになっているかという問題」を解明すべく，一般に「資本の一般的理論とその発展諸段階の理論との関係」が『資本論』ではどのように考えられているか」という問題の検討をつうじて，以下のように述べている¹⁸⁾。

『資本論』においては，「資本の一般的概念あるいは理論とその発展諸段階の概念あるいは理論とは，いろいろの意味で同一関係におかれている」というのが著しい特色となっている¹⁹⁾。すなわち，『資本論』は資本制的生産様式のさまざまな歴史的段階を取り扱っており，その段階の「概念を基礎とするその段階特有の諸法則の体系，すなわち段階の理論が与えられている」が，「これらの発展諸段階の理論が，資本の一般的理論の実質的内容をなしている」のであって，そういう意味では，「『資本論』は資本の一般的理論でもあれば，またその発展諸段階の理論あるいは段階的發展の理論でもある」²⁰⁾。資本の一般的理論とは発展諸段階に関する特殊理論の外にあるのではなく，

18) 見田石介「資本の一般的理論とその特殊的发展諸段階の理論との関係について」(『見田石介著作集』第三卷，大月書店，1976年) 178ページ。

19) 同上，178ページ。

20) 同上，179ページ。

特殊な発展諸段階の理論そのものが一般的理論であり、その実質的内容をなしているということではなければならない。一般的なものと特殊なものとの同一性という関係が、一般的理論と発展諸段階の理論の間にも貫徹しているということである。

この同一性は、第一に、一般的理論、一般的なものは発展諸段階の理論、特殊なものの基礎をなし、特殊なものは一般的なものなしにはありえない、という関係のなかに貫徹している。資本の本性（＝剰余価値を生む価値・搾取関係・階級関係）は資本のあらゆる発展諸段階を貫く「共通の基礎」をなし、それらの発展諸段階を「ほかならぬ資本の一つの段階とする」²¹⁾。というのも、資本の一般的概念あるいは理論とは、「資本を資本たらしめるところの剰余価値取得のための生産関係」という、この資本概念そのものであり、「この概念のうえに展開されたその一般的な諸規定、諸法則の体系としての理論」なのだから、一般的理論は発展諸段階の理論の基礎であり、後者は前者なしにはありえないのも当然なのである²²⁾。

もっとも、資本の本性が貫徹するという同一性だけでは、資本の発展諸段階は段階たりえないのであって、「資本の発展段階が段階である」ためには同一性とは区別される「一定の区別」がなければならない。しかもその区別は資本関係にたいして外的な区別ではなく、剰余価値の取得の上での区別、しかも量的ではなく、形態上での区別でなければならない²³⁾。「資本の一般的理論はその発展諸段階の理論の基礎だ」というのは、一般的理論と発展諸段階の理論の同一関係を見る際の基礎的な関係だが、それだけでは、「一般的理論と特殊な理論は、また別のものと見られている」²⁴⁾。基礎というレベルでの同一性の把握にとどまるかぎり、一般的理論と発展諸段階の理論との関係は、依然として外的・偶然的な関係に止まっている。基礎としての一般的理論は何によって特定の発展諸段階の理論としての形態をとらざるを得

21) 同上, 180 ページ。

22) 同上, 183 ページ。

23) 同上, 180 ページ。

24) 同上, 188 ページ。

ないのか、それは、偶然的なことなのか、必然的な関係なのか、ということが明らかにならない。一般的なものと特殊なものとの関係が外的・偶然的な関係に止まるかぎり、特殊なものとの関係も外的・偶然的な関係にとどまるということになる。だから、基礎と形態という関係だけでは、発展諸段階の理論の関係も、果して発展諸段階の関係として必然的な内容をもっているのかどうかは全く明らかにならないということである。

資本主義の一般的理論と発展諸段階の理論の同一性の第二の側面は、一般的理論は特殊な発展段階の理論と同じものであるということ、あるいは、それ自体一つの発展段階の理論だということである。見田氏の『資本論』の方法の研究のなかでも、突出する方法論上の意義をもつのは、まさにこの点である。資本の一般的な概念は、剰余価値生産の一つの形態であり、その最初の発展段階である絶対的剰余価値生産の内部で与えられ、したがって、剰余価値の生産は発展諸段階に共通のものなのだが、その概念規定は絶対的剰余価値生産の「外で」与えられるのではないということ²⁵⁾、というのも、資本の一般的概念（＝労働力商品をその等価を生み出す時点を越えて生産過程において消費することで、剰余価値を生み出す価値）とは、絶対的剰余価値生産の概念そのものであり、しかも生産過程において行われる以上、産業資本の概念にはかならないからである。資本の一般的概念というのは、「絶対的でも相対的でもないような剰余価値生産ではなく、また産業資本でも商業資本、利子生み資本でもない、それらを越えた資本ではなかった」ということである。まさに、資本の一般的概念が絶対的剰余価値生産という特定の発展段階において与えられるのは、「資本の一般的概念はその最初の段階の特殊な概念と同じものだからである」²⁶⁾。

そもそも、一般的なものが特殊なものと同じだというのは、あらゆるものの現実的な在り方なのであって、あらゆるものは、「その誕生の際には、そのものがそのものであるためにはそれだけは必要だが、それ以上はなくて

25) 同上, 188 ページ。

26) 同上, 189 ページ。

もよいというもっとも単純な姿で現れ」,「それは本質的なものだけからできている」という関係のなかに見られることなのである²⁷⁾。かくして、資本の一般的理論・概念というものは、最初の発展段階として与えられる、最も単純な形態の分析によって確定されるのだが、実は、資本一般の概念は第二のより発展した段階の形態の認識に移行することによって、一般的なものそのものとして特殊的な形態から剝奪されたものとして知られるのでもある。ところがそうすると、資本一般の概念は特殊的な形態とは無縁なものとして、概念そのものとして存在するかのようにも考えられることになるのだが、実はやはりそうではなく、一般的なものは特殊的な形態と無縁に、その外部にそれ自体として存在するというのではなく、特殊的な形態に拘束されてのみ存在しているのである。かくして、一般的なものとは、資本一般にしてもそうであるが、特殊的なものの総計としてのみ存在するということになる。

「資本の一般的概念とは、なにかその発展諸段階の概念の外に、それとは別のものとしてあるのではなく、最初の段階の資本概念のことであり、最初の段階の概念からつぎの段階にすすむ過程のことであり、その総計のことであり、また一つ一つの段階の特殊的概念のことであるということになる」、あるいは、「資本の一般的概念はけっして固定的なものではなく、……、さらに発展するということであり、その発展諸段階の概念と切り離し得ない統一にあるということである」²⁸⁾。あるいは逆に、「資本そのものは、各段階の外にあってこれを包摂するものではなく、各特殊段階の総計でしかないのと同じく、各特殊段階もまた資本そのもの、資本一般である。ここでも、一般的なものと特殊なものは論理的に上位下位の関係にあるのではなく、同格であり、同一のものとなっている」²⁹⁾。

このように、資本一般の概念、ないし、普遍性のモメントにおいて把握される資本概念というものについての、総括的な規定が与えられているが、こ

27) 同上, 189 ページ。

28) 同上, 192 ページ。

29) 同上, 199 ページ。

ここで示されるのは、「普遍はそれ自体一つの特殊である」、「普遍は特殊の総体としてある」、「特殊はそれ自体普遍である」という、普遍と特殊の同一性に関する弁証法的認識の諸側面である。だから、普遍と特殊の関係、それらの同一性を「実体と形態」、「基礎と形態」の関係としてだけ見るのは、一面的である。このような見方においては、資本一般は特殊的な発展諸段階に共通に妥当するものと見られていることは確かだが、一般的なものは自ら自己を特殊化し、自己を止揚する原理を自己の胎内にもつものとして捉えられることはなく、したがって変化・発展は自己の外部の力によってもたらされる外的・偶然的な事態とされることになる。

事態そのものに即して見るなら、客観的現実の在り方として、とりわけ有機的統一としての生命、主体の在り方として、それらは自己を止揚する原理を自己の胎内にもち、そうであるからこそ、自ら変化・発展するものとしてあるのである。たとえば、資本概念は「後に来るすべての発展諸段階を即自的にふくんで」おり、資本の各段階はことごとく「資本概念そのものにあらかじめ含蓄されているのである。それはそうした特殊化の原理を自分のうちにもっている一般である」。つまり、一般的なものと特殊的なものとの関係、それらの同一性は、主体と形態との関係としてあるというのが、客観的現実としての有機的全体の在り方なのであるから、普遍と特殊の同一性に関する認識も、このレベルに到達することによって、より深く認識されることになる、ということである。

② 資本主義一般と独占資本主義の関係

以上に見てきた、資本の一般理論と発展諸段階の理論の同一性についての理解は、資本主義一般の理論と独占資本主義の理論の関係、したがって、『資本論』と『帝国主義論』の関係にも妥当することは言うまでもない。資本の帝国主義段階は、資本の一定の発展段階であり、したがって、資本の一般理論は帝国主義理論の基礎である³⁰⁾。

30) 見田石介「資本の一般的理論とその特殊的発展段階の理論との関係について」↗

帝国主義研究における一つの重要な問題は、「資本の一般的な理論すなわち資本の原理と帝国主義の理論との間に、どのような論理的な関係があるかという問題」であるとして³¹⁾、見田氏は次のように述べている。

まず、資本の一般的理論とは、「その発生から死滅に至るまでのその発展法則を明らかにし、その各発展諸段階の理論を発生的に展開していくことにはかならないのであって、資本の発展諸段階の理論」と同一性をもっているのは当然である³²⁾。資本の一般的理論とは、なにか発展諸段階の理論とはことなり、それらの外にある単なる共通性としての「一般的なもの」というものではなく、資本制的生産様式の発展諸段階の理論そのものにかならない。すなわち一般的理論はその実質的内容においては特殊理論であり、「一般的なものとは特殊的なものの全体である」という側面である。

次に、特殊な発展諸段階の理論についてであるが、それは、資本の一般的概念から出発して、各段階を必然的な契機とするその発展史をその当の段階までたどることにかならない、すなわち「資本の概念あるいはその一般理論をもっとも基礎的な、もっとも抽象的なものから次第により具体的なものへと展開してゆく過程」³³⁾、それが発展諸段階の理論であるのだから、特殊理論の側から見ても、それは一般理論とのあいだに同一性をもっているということである。資本制的生産様式の発展諸段階の理論、すなわち特殊なものとは、資本の一般理論・概念の特殊化したものにかならないということである。特殊なものは単に特殊なものなのではなく、一般的なものであるのである。ここでは、一般的なものと特殊なものの同一性が、この側面から見られる。

このように、一般理論というものは、固定的なものとしてではなく、その後の発展諸段階を理論的に概括し、根拠づけつつ、自らも一般理論としての内容をさらに具体化し、次第に発展してゆくものである。だから資本の

／ (『見田石介著作集』第三巻、大月書店、1976年) 187ページ。

31) 見田石介「宇野弘蔵氏のいわゆる原理論と段階論について」(『見田石介著作集』第三巻、大月書店、1976年) 203 ページ。

32) 同上、203 ページ。

33) 同上、203 ページ。

一般的理論を与えることと発展諸段階の理論を与えることは同一性をもっているということである。新しい段階は、それを生み出した段階の否定として、「それと対立的に区別されるが、同時にそれにとって別のものではなく、それに内包されたものの実現、その具体化」である。言い換えれば、資本の本性は、「たんにその発展諸段階の根底に共通の実体として静かに横たわっているもの」ではなく、「つぎつぎに自らそうした段階を形成してゆき、そうした形態をとってはぬいで動いてゆくところの実体、すなわち主体」である³⁴⁾。

一般的理論・概念は、自己と矛盾するように見える新しい発展諸段階の提起する新しい事実をも説明し、そのことによって新しい事実を根拠づけうるものであるということを示すことによって、一般的理論としての真理性が検証されるが、その過程は同時に、特殊的な諸段階の理論・概念が一般的理論に還元され、それらが一般的理論の特殊化としてはじめて特殊的理論であるということを示す過程でもある。一般的なもの「前進」して特殊的なものを根拠づけるが、それは同時に特殊的なものによって根拠づけられる「後退」の過程でもある。他方、このことを特殊的なもの側から見ると、特殊的なものは、一般的なものによって根拠づけられることによって自らの特殊的なものとしての実を示すのだが、その過程は同時に、一般的なもの根拠づける過程でもある。

かくして、資本主義一般と独占資本主義との関係について、見田氏は総括的に次のように述べる。「自由競争がその直接の対立物である独占に転化し、そこに新しい資本主義の段階、帝国主義の段階が形成されている」けれども、それによって「古い資本主義がきえてなくなった」わけではない。「帝国主義のもとでも資本主義一般の基本的特質はどこまでも失われはしない」³⁵⁾。あるいは『資本論』と『帝国主義論』との関係としては、こうも言われる。自由競争が独占の直接的な対立物でありながら、その一般的な基礎、土台を

34) 同上, 204 ページ。

35) 同上, 207 ページ。

なし、独占がその一つの形態、その上部構造をなしているのと同じように、「経済学批判体系」は『帝国主義論』の基礎、土台をなし、そこに生きつづけており、後者はその前提のうえに積み重ねられた上部構造である³⁶⁾。帝国主義段階においても「古い資本主義」はなくなりはない、ということの意味について、ここでは正しく指摘されている。帝国主義段階の資本主義と並んで、それとは区別される「古い資本主義」が「実在的」に有るといった俗流的な理解が存在しているが、決してそのようなものではない。「古い資本主義」が存在しているということは、帝国主義の段階に至っても資本主義一般の基本的な特質は貫徹している、ということを述べたものだということである。それも当然のことであって、帝国主義段階とは、資本主義の帝国主義的段階にほかならないのであるから、それは資本主義一般の特殊な発展段階として存在するのであって、そうである以上、資本一般の基本的特質が貫徹している。貫徹していなければ、それは資本主義以外の他の何ものかの発展段階であるほかはない。

(3) 資本主義一般と発展諸段階の関係についての諸説批判

資本主義一般と発展諸段階（とりわけ独占資本主義）との論理的な関係を、普遍（一般）・特殊・個別の弁証法的同一という見地から、次の四つの側面に総括しておく。第一の側面は、資本主義一般（＝普遍）はあらゆる「特殊」的な発展諸段階を含んでいる具体的普遍（＝矛盾、生きている矛盾）であるということ、第二の側面は、資本主義一般（＝普遍）は一つの「特殊」的な発展段階としての「自由競争段階」の資本主義の概念であり、資本主義一般のもつ「前進の衝動」、「特殊的なものを反発する動力としての矛盾」とは、かくして、資本主義一般は特殊な諸形態をとって定在するという矛盾、すなわち「概念と定在の不一致」ということにある。第三の側面は、独占資本主義（＝「特殊」的な形態）は他の「特殊」的な形態としての「自由競争の

36) 見田石介『「資本論」・『帝国主義論』・国際経済——杉本昭七氏の見解に関連して——』（『見田石介著作集』第五巻、大月書店、1976年）199ページ。

資本主義」に対して一つの「特殊」的な段階だが、それは資本主義一般から生まれたのだから、それ自体資本主義一般（＝「普遍」）である。そして第四の側面は、資本主義一般（＝「普遍」）は「自由競争の段階」（＝「特殊」）の資本主義と「独占段階」（＝「特殊」）の資本主義の全体であり、そこに自己の十全な定在をもつという関係である。

現代資本主義把握の理論的基礎となる、資本主義一般と独占資本主義の関係を、このように理解するということは必ずしも一般的ではない。それどころか、以上の見地とは異なる多くの見解が示されているので、これらの見解のなかから、代表的なものをとりあげ、それを批判的に検討する。ただし、この問題の本格的な検討は、他の機会に譲ることとして³⁷⁾、ここでは主として、これらの見解の輪郭を示し、その方法論上の側面に限定して検討する。

資本主義一般と独占資本主義との関係を理論的にどのように把握するかという問題は、そもそも資本主義一般についてどのように認識するかという問題でもある。この点については、次のような見解が支配的であると考えられる。資本主義一般の理論とは、「完全な自由競争の支配する19世紀イギリス資本主義」の分析による理論的抽象の産物であり、それは資本主義が資本主義であるかぎり、あらゆる発展諸段階の資本主義に「妥当する」共通性を把握する体系である。『資本論』によって与えられるのは、そのような共通性としての資本主義一般の理論なのであり、したがって、それは、独占資本主義の理論や「現代資本主義」の理論に対する理論的「土台」としての位置を占めるにすぎない。だから逆に、独占資本主義の理論や現代資本主義の理論体系というものは、資本主義一般の理論としての『資本論』体系の「枠組」を拡張することによってしか得られない。論者によって重点・力点のおき方は異なるが、基本的な見地はこのようなものである。

けれども、このような見解は、資本主義一般と発展諸段階の関係を、概念的に把握するという見地からすれば、まったく一面的である。客観的現実と

37) 本誌の引き続く各号に予定するテーマは、『『資本論』と『帝国主義論』』（本誌第32巻第3号掲載予定）、「競争と独占」（本誌第32巻第4号掲載予定）、「資本一般と金融資本」（本誌第33巻第1号、第33巻第2号掲載予定）などである。

しての資本主義の歴史，すなわち自由競争資本主義と独占資本主義との関係を，資本主義一般の理論と発展諸段階の理論との論理的な関係として把握する，というのがこの問題の性格であり，それは概念とその展開形態との関係，すなわち普遍と特殊の区別と同一についての認識を前提としてのみよく把握されるにも拘らず，そのような見地を一貫するという点で不十分だからである。

① 資本主義一般と「抽象的普遍」

資本主義一般と発展諸段階の関係を，明確な方法論上の自覚に基づいて把握しようとするという点で，本間要一郎氏の見解には，学ぶべき多くの点があるが，氏にあってもなお，方法論上の基礎としての普遍と特殊の区別と同一についての理解が徹底しているとはいえない。

資本主義一般と発展諸段階との関係を，氏は次のように捉えている。「自由競争資本主義も独占資本主義も，それぞれに，資本主義の特殊な段階」であり，「資本主義としての本質において変わりがないという点で，一般理論的に解明されなければならない共通の基盤の上に立っている」。「この一般的本性とのかかわりにおいて，独占資本主義も自由競争資本主義も，それぞれに特殊であることが確定されうるのであって，一つの特殊をもう一つの特殊と対比しただけでは，一般が見失われることになって，そもそもそれらが何故に特殊であるのかも判然としない」。だから，現代資本主義の理論は，「それ自身が資本主義の特殊な一時期にしか妥当しない自由競争資本主義の理論からの」展開としてでなく，「資本主義の一般的規定に基づく特殊段階理論の展開，一般的本質規定の段階的形態規定への具体化という形をとらざるをえない」のであって，これが，「現代資本主義をその成層構造において捉えるための認識の序列」である³⁸⁾。

ここにあるのは，「資本一般の理論」と「段階の理論」との関係と，具体的な「歴史的定在としての資本主義の各発展諸段階」との関係如何という問

38) 本間要一郎『現代資本主義分析の基礎理論』（岩波書店，1984年，6ページ）。

題なのだが、これには多様な側面がある。

第一は、「資本一般の理論」ないし「資本主義の一般理論」と発展諸段階の理論すなわち自由競争資本主義と独占資本主義の理論との関係という問題である。この問題は、資本主義一般の理論とは、発展諸段階の共通の「基盤」としての「資本主義一般」に関する理論なのかという問題とも関連する。

資本主義一般という場合、一般＝普遍（Allgemeinheit）という範疇は「すべてに共通する」という一面をもつのだから、資本主義一般に関する認識ないしその理論は、資本主義の各発展諸段階に共通する「基盤」に関する認識だというのはその通りだが、それは単なる共通性についての認識ではない。資本主義一般の理論によって把握される関係が、資本主義の各発展諸段階に共通する「基盤」であるのは事実だが、どのような内容をもって共通しているのか、あるいは逆に、各発展諸段階が「共通性」としての資本主義一般に対してどのように係わるのかということについて独自に問われねばならない。

資本主義は、歴史的には「自由競争資本主義」として登場し、つづいて独占資本主義の段階に至るのだが、かかる歴史的な定在の変化を通じて、資本主義を資本主義たらしめる規定はなんら変化していない。そういう意味において、資本主義とはたえざる変化の中に自己の同一性を貫徹する一つの有機的全体としてのみ定在するのであり、その発展諸段階は他のなにものかによって外的・偶然的にもたらされるのではなく、自ら自己を特殊化することによって段階に規定するのである。

資本制的生産諸関係の総体を思惟において再生産する資本主義一般の理論とは、したがって、単なる共通性としての資本主義、ないし抽象的普遍として把握される資本主義一般の理論ではなく、自らを発展諸段階に特殊化する動力を保持する具体的普遍として把握される資本主義一般の理論だということになる。資本主義一般をこのようなものとして把握することによって初めて、歴史的な発展段階としての「自由競争資本主義」も「独占資本主義」も、いずれも、具体的普遍としての資本主義一般の定在形態として把握されるこ

とになる。このように、各発展段階が具体的普遍としての資本主義一般の特殊化として把握されることによって、特殊な発展段階としての「自由競争資本主義」と「独占資本主義」との関係も外的・偶然的なものとしてではなく、必然的な発展段階として把握されることになるのである。

歴史的な発展段階の関係として考えるなら、「自由競争資本主義」も「独占資本主義」も、それらが資本主義の発展段階たりうるのは、それらの「基礎」ないし「基盤」としての「資本主義一般」（単なる共通性）に外的な条件を加えて成立する「特殊」な段階として存在するような「段階」だからではなく、具体的普遍としての資本主義一般が自らを具体化し、特殊化し、自ら自己の定在形態として存在する、その在り方が「自由競争資本主義」であり、「独占資本主義」だからである。言い換えるなら、「自由競争資本主義」にしろ、「独占資本主義」にしろ、それらが資本主義の発展諸段階として必然性をもって関係するのは、具体的普遍としての資本主義一般が自らを特殊な段階として規定・反発するからにはかならない。

資本主義一般が各発展段階の単なる共通性としての「基盤」にすぎないのだとしたら、この「基盤」の上に立つ発展諸段階の特殊性を法則的・必然的に規定するものは何か。この段階を段階たらしめる規定性を資本一般からの法則的展開によって与えられないなら、そこで確定される資本主義の発展諸段階の理論は、あくまでも外的・偶然的に規定されているにすぎない。だから、一般的本性との係わりにおいて各段階の特殊性が規定されるのだと言っても、この一般的本性との係わり方が問題なのである。「基礎」だろうが「基盤」だろうが、「一般的本性」が与えられれば、特殊性が規定されるとか、特殊と特殊との関係も明らかにされるとか考えるなら、それは安易に過ぎる。

第二に、資本一般の理論と独占資本主義の理論との関係、ないし、資本主義一般の理論と特殊な発展段階の理論と、資本主義の歴史的な発展諸段階との関係という問題である。

歴史的に具体的な存在としての資本主義は、特定の国の特定の発展諸段階

の資本主義でしかないのだから、「自由競争資本主義」なるものと「独占資本主義」なるものが、ただちに歴史的に具体的な存在としての資本主義だということにはならない。資本主義の歴史的な定在とは、特定の国の「自由競争資本主義」と特定の国の「独占資本主義」なのだから、「自由競争資本主義」が「そのもの」として歴史的かつ具体的に定在するなどという事態を表象することさえ不可能である。「自由競争資本主義」とは、明らかに一つの抽象なのであって、独占資本主義段階以前の歴史的な存在としての資本主義を捉える規定にほかならない。だから、資本主義一般の理論は、なによりもこの「自由競争資本主義」の分析によって与えられる以外にはない。独占資本主義が現実的に存在する以前、「自由競争資本主義」は資本主義そのものだったのだから、その分析だけでは「自由競争」という規定さえ与えられる筈がない。「自由競争」とはあくまでも独占資本主義との反省規定なのである。

「自由競争資本主義」の分析によって得られる資本主義一般の理論は、しかしながら、「自由競争資本主義」それ自体の制限、すなわち当該発展段階によって規定される制限性によって、「自由競争」段階に特殊な規定性を伴わざるをえず、かかる特殊性に纏い付かれるかぎり、同時に、「自由競争」段階の特殊な理論でもある。かくして、資本主義一般の理論とは、単なる思惟による抽象の産物として、発展諸段階の相違にも拘らず、如何なる発展諸段階にも妥当する「共通」の規定によって構成される抽象的普遍として構成されるのではなく、「共通性」としての抽象的普遍が同時に特殊な形態規定を受け取り、かかる意味において普遍と特殊との矛盾すなわち具体的普遍として規定されているのである。このように、自らを具体化する普遍として規定されるからこそ、資本主義一般の理論は独占資本主義の段階へも法則的・必然的に自らを展開することができるのである。そうではなく、資本主義一般とは、各発展諸段階に共通する規定の総計にすぎないのだとすれば、かかる「基盤」の上に、各発展諸段階を登場せしめる諸規定の必然性は何によって与えられるのか、その法則的な把握が不可能なら、つまるところ、発展諸段階の法則的連関を把握することは放棄されることになる。

独占資本主義についても同様であろう。歴史的、具体的な定在としての独占資本主義とは、特定の国の独占資本主義であって、「独占資本主義」そのものは、すでに一つの抽象である。独占資本主義の分析によって独占段階の資本主義に固有の諸側面・諸関係が独占的な諸範疇として反映され、しかもそれらが、「自由競争資本主義」の分析によって与えられるかぎりでの「資本主義一般の理論」によって根拠づけられることによって、独占資本主義と資本主義一般との同一性が確証され、同時に、「資本主義一般の理論」は、独占資本主義の諸範疇をも含む範疇体系として具体化され、その結果、資本主義一般の理論は単に「自由競争資本主義」の段階にのみ限定される規定ではなく、「独占資本主義」をも含む資本主義の全発展段階におよぶ外延をもつ理論体系として具体化されることになる。

② 自由競争資本主義と資本主義一般の理論

A) 歴史的発展段階としての自由競争資本主義と資本主義一般の理論

資本主義一般の理論とは、資本主義のあらゆる発展諸段階に共通な「特質」によって構成される抽象的普遍だという理解は、資本主義一般の理論と歴史的な発展諸段階とのあいだに外的、偶然的な関係しか見ない見解なのだが、このような見解は、歴史と論理との対応を一面的に否定する見地に立っている。

本間氏は、歴史的には、「独占資本主義に先行するのは自由競争の支配する資本主義」であるが、このことから、「経済学の現代的体系のなかに、自由競争資本主義の経済理論と独占資本主義の経済理論の二つが含まれ」、前者の展開の中から後者が導き出される」と考えるなら、それは「認識の体系における理論的な展開が現実の歴史の歩みに直接に対応するもの」と考える、いわゆる「論理＝歴史説」の誤りを犯す」ことになるとして³⁹⁾、論理と歴史との一致を拒否した後で、「完全な自由競争の支配した19世紀イギリス資本主義」と資本主義一般の理論との関係について次のように述べている。

39) 同上、5 ページ。

「完全な自由競争」の支配した19世紀イギリス資本主義は、それを分析して資本主義一般の理論を確立する好都合な条件を提供したけれども、そこで確立する「完全な自由競争」は、それ自体一つの歴史的な条件であって、その分析によって得られる資本主義の一般的規定とは厳密に区別されねばならない、というのである⁴⁰⁾。

第一に、資本主義の発展諸段階を媒介する歴史的な関係は、それを分析して得られる認識の体系とは区別されねばならないというのは正しい。だが同時に、歴史的な条件ないし関係との一切の係わりをもたない「一般的規定」が歴史的具体的な関係を把握するうえで何らの理論的な意味をももたないというのももう一面の真理なのであって、この二つの側面を統一的に把握するにはどうするかということが問題となる。そこで、第二に、「完全な自由競争の支配」というのは、あくまでも歴史的な条件であり、その条件は資本主義の一般的諸規定を解明するのに「好都合な条件」を提供したのだけれども、「完全な自由競争の支配する資本主義」は資本主義の一般的諸規定のなかに含めることはできない、という見解が問題となる。

歴史的な存在としての「完全な自由競争の支配する資本主義」が資本主義の一般理論を構成するうえで「好都合な条件」を提供したのは事実だが、そのことをなにか「たまたま好都合な条件」があったから、その分析によって資本主義の一般的な本質を認識しえたということとして理解するなら、それは誤りである。資本主義は、自立した生産様式として登場するかぎり、自らを「自由競争の支配する資本主義」としてしか規定しえない。だからこそ、自由競争の支配という歴史のなかに資本一般を抽象しえたのである。

ところで、資本の本性は最大限の価値増殖にあるが、その本性は「競争の原理」によって規定される商品生産社会を基礎にしてのみ実現されるものである以上、資本制的生産様式が支配的な生産様式として登場するのは「競争原理」を妨げる前資本制的「独占」の除去と表裏をなす。資本は、支配的な生産様式として登場する過程で、「商品生産者」としては、前資本制的諸関

40) 同上、5 ページ。

係に対する「競争原理」の「自由な貫徹」を推進する役割を担うのだが、同時に、多数の資本間の関係のなかで最大限に価値増殖することを自己目的とする経済主体としては、他の資本に対する敵対的な関係のなかにもみ存在するのであって、かかる資本間の敵対的な関係としての「競争原理」の貫徹は、自己の本性に基づく「自由競争」の否定への衝動として発現せざるをえない。

だから、19世紀イギリス資本主義においては、「完全な自由競争」が存在したとか、近似的に完全な自由競争が存在したといっても、その内容は、「自由競争」の否定への衝動と表裏の関係をなすものとしてのみ存在しているのであって、一面的に「自由競争」だけが存在していたというのではない。

競争とは商品生産者間の関係であり、しかも資本制的生産が支配するもとでは資本制的商品生産者間の敵対的な関係なのだから、「自由競争」とは、最大限の価値増殖を追い求める資本が相互に敵対的に関係し合う「自由」が存在するということであり、言い換えるなら、競争の「自由」が保持されているような「競争」ということである。敵対的に振る舞う「自由」が保証されているもとでの敵対的な振る舞い、これが「自由競争」ということの意味であろう。このような「競争の自由」は、資本主義の歴史的な発展段階に対応して、種々の異なる条件に媒介され、異なる発現の形態をとっている。「競争の自由」を妨げる障害が除去され、資本間の相互に敵対的に振る舞う関係が顕現する歴史的条件のもとにあっては、文字どおり、「競争の自由」は「自由競争」として現象した。

けれども、資本間の敵対的な関係そのものが、「競争の自由」の否定を内的な契機として含む関係なのだから、「競争の自由」の現象形態としての「自由競争」は法則的・必然的に否定され、「競争の自由」は潜在的な位置に引き下げられて行く。これが、資本主義的独占の成立による独占資本主義段階への移行である。資本主義の独占段階への移行といっても、資本間の敵対的な関係そのものが消滅するわけではなく、したがって、「競争」が消滅するわけでも、「競争の自由」が消滅するわけでもない。資本間の敵対的な関係は、いまや独占的・支配的地位を占める資本と非（被）支配的地位を占

める資本との関係に転化しているが、それでも、経済主体としての多数の資本間の関係が存在するかぎり、そこにあるのは敵対的な関係としての「競争」以外の関係ではない。だから、たとえ顕在的ではないとしても、そこには「競争の自由」は存在しているのである。独占とは、「競争」ないし「競争の自由」の一つの存在形態なのである。

このように考えると、そもそも「完全な自由競争」として氏は何を表象するのかという問題はあるが、資本主義の歴史的な定在としては、「競争の自由」が顕在する資本主義と「競争の自由」が潜在する資本主義しか存在せず、しかも、資本主義の一般的理論とは、これら資本主義の歴史的な定在の分析によって得られる理論体系としてのみ構成されるものだとするれば、「完全な自由競争の支配する歴史的条件」を捨象した資本主義の一般的理論とは、つまるところ「完全な自由競争の支配が消失した資本主義」の歴史的条件を少しも含まない資本主義の一般的理論ということになるのであって、それは畢竟、歴史的な定在とは無縁な抽象的構想物以外のなにものでもない。それはなんら現実の資本主義との連係をもたない無力な抽象にほかならない。資本主義の一般的理論とは、けっしてそのようなものではない。

このようなことになるのも、氏にあっては、資本主義の一般理論とは抽象的普遍以外のなにものでもないという堅い確信があるからであり、しかもその根底には、普遍と特殊の弁証法的な同一と区別に関する認識が欠けているという方法上の致命的な欠陥があるからなのである。

氏の言うように、マルクスの『資本論』が、資本主義の発展諸段階に関するいかなる規定も含まない、発展諸段階の規定から解放された一般的理論だとしたら、その理論体系から独占資本主義段階の理論への展開そのものさえ課題とはならない。一般的理論とは、特殊的な段階ないし形態に関する理論との統一のうちにあってのみ一般的理論としての位置を占め得るのであって、この矛盾によって一般的理論は自己を特殊的な理論の体系に展開することができるのである。資本主義の発展諸段階はすべて資本一般が自己を特殊化したものとして、その意味でいずれの段階も資本主義一般の特殊な形態として

存在している。現実には、資本主義一般と資本主義の特殊な形態とが層をなして「併存」しているのではない。一つの有機的全体として存在する資本主義の全体を、一般的なものとその特殊な形態としての段階として「二重に」見るということなのである。

B) 自由競争と資本主義一般の運動形態

本間氏とは逆に、資本主義一般とは「完全な自由競争」の支配する資本主義についての理論であり、したがって、「完全な自由競争」こそ資本主義一般の法則にとって妥当な運動形態だという議論がある。

森岡孝二氏は、次のように述べている。「自由競争とは社会的総剰余価値にたいする諸資本の平等な配分関係であり、剰余価値の吸出者および取得者としての多数の諸資本の相互関係そのものである」⁴¹⁾。『資本論』は理論的には、「自由競争の絶対的支配」を、したがって「資本主義一般の諸法則の純粹な展開を前提している」⁴²⁾のだから、「『資本論』において理論的諸規定が与えられている資本は、その本性の自己表現が自由競争の支配であるような、それゆえにその本性が自由競争の支配を前提としてはじめて解明されるような資本である」。かくして、この資本は、資本主義の歴史的実在とその発展をもっとも普遍的・本質的に映し出す資本であり、それは、「『資本論』の資本を一身に代表する産業資本である」⁴³⁾。「資本主義時代をみずから切り開いてきた産業資本こそが資本主義にとってもっとも一般的な資本類型」⁴⁴⁾であるが、産業資本が資本主義のいっさいの「資本類型の一般的基礎であることは、自由競争が資本主義的生産諸関係の全体系の一般的基礎であることと表裏一体の関係をなしている」。すなわち、剰余価値を創造することによって増殖する産業資本こそ、資本制的生産様式の創出者であり、自由競争こそそのうえで剰余労働の吸収者として運動する産業資本に「もっとも妥当な運動

41) 森岡孝二『独占資本主義の解明』（新評論、1979年）17ページ。

42) 同上、17～18ページ、（注9）。

43) 同上、18ページ。

形態」だからである⁴⁴⁾。

まず第一に、資本主義一般の法則の貫徹と「自由競争」との論理的な関係についてである。氏は、「資本主義一般の法則」の「純粋な展開」と、「自由競争の絶対的支配」とを等置している。すなわち、「資本主義一般の法則」は「自由競争」のもとで「純粋に展開」するという認識である。

氏の言う「資本主義一般」とはいかなる論理的レベルで把握されるものか、その内容はいかなるものかが不明確だが、資本主義一般の法則が「自由競争」のもとでは「純粋」に展開するということは、「独占」のもとでは純粋な展開は妨げられるということを含んでいる。このように、「資本主義一般」の法則というものを、ある条件のもとでは「純粋に展開」し、他の条件のもとでは「純粋に展開」しないものと捉えるということは、実は「資本主義一般」の法則というものを、これら「条件」とは無関係に、それらの条件にたいして外的・偶然的に対立するものとして捉えるということである。言い換えるなら、「資本主義一般」の法則が「自由競争」や「独占」という資本間関係の特殊な形態とは無関係に、規定されるということである。それは、自己の運動を媒介する条件を能動的に規定する主体としてではなく、外的な条件によって規定されるだけの「受動的」な存在として資本主義一般を描くものにほかならない。

「資本主義一般の法則」を、資本の運動法則を媒介する資本間関係すなわち「自由競争」や「独占」という資本間関係の形態を捨象して「一般的に」規定することなどできるものではない。「資本主義一般」の理論とは、単なる抽象的普遍でもなければ、「資本主義一般」の運動を媒介する条件と無関係な存在でもなく、あらゆる運動の条件を自ら措定し、能動的に自己を展開する具体的普遍である。だから、「資本主義一般」とは、氏の言うそれとは異なり、何よりも、「競争の自由」を保持する資本間の関係が前提され、かかる条件に媒介されるものとして貫徹する資本の運動法則を捉えたものでなければならない。「競争の自由」が失われ、独占が支配的な関係として登場

44) 同上, 19ページ。

する独占資本主義の理論に反省すれば、そのかぎりで、「資本主義一般」とは「自由競争」の支配する資本主義だということなのである。

第二に、「自由競争」は産業資本に「もっとも妥当な運動形態」だという場合に含意される内容についてである。ここでは、先の「資本一般」に関する規定を前提として、「資本主義一般」に関する規定の問題が登場する。というのも「自由競争」が産業資本の運動にとってもっとも「妥当な形態」かどうかという問題は、実は「資本主義一般」とは何かという問題だからである。産業資本概念（資本概念）による概念的把握の体系として与えられる「資本主義一般」の理論は、たしかに、一面では、資本主義が資本主義であるかぎり貫徹する法則についての理論だという意味では一般的法則のもつ「共通性」という側面に関する認識体系である。だが、かかる法則体系はそのものとしてではなく、特殊な形態において貫徹するのであり、それによって現実的な法則たりうるのである。そうである以上、「資本主義一般」の理論も、自ら発展諸段階へと具体化、特殊化する能動的な主体として資本制的生産様式を把握するものでなければならないのであって、このようなものとしての「資本主義一般」を把握することこそ「資本主義一般」の理論の課題なのである。

産業資本の運動法則が資本制的生産様式を自立的な生産様式として成立せしめる原理であるということ、したがって産業資本概念の展開によってのみ資本制生産の法則的連関についての一般的な認識の体系が確立されるということ、その際、資本間の関係を規定する原理は、「多数の資本相互のあいだの交互作用として現れる内的本性」の発現としての「競争」であり、しかもこの「競争」の「自由」がすべての資本に保証されているという意味での「自由競争」が前提であるということ、このような内容において「資本主義一般」の理論が確立されねばならないし、そのようなものとして『資本論』は理解されねばならない。

そうではなく、氏のように、産業資本「類型」を「もっとも一般的基礎」とする資本主義が「自由競争」を基礎とするのは、「自由競争」こそ産業資

本に「もっとも妥当な運動形態」だからだというなら、それは単なる同義反復であって、なんら「資本主義一般」と「自由競争」との論理的な関連を媒介したものとは言えない。

「自由競争」こそ「産業資本にもっとも妥当な運動形態」だというのは、資本主義一般と自由競争の関係を二重三重に誤って理解するものである。

「妥当」ということを「ふさわしい」と同義として理解しよう。すると、「自由競争」が産業資本の運動形態としてもっとも「ふさわしい」なら、「独占」は産業資本の運動形態としては「ふさわしくない」ということになるが、それなら何ゆえに「独占」という「ふさわしくない」運動形態を資本は自ら作り出し、「ふさわしくない」運動形態のもとで長期にわたって運動しうるのであるのか。「自由競争」が産業資本の運動形態として「妥当」かどうかという立論は、そもそも産業資本の概念によってその運動形態を根拠づけるというのではなく、産業資本の運動形態の外からそれを判断するという観点によっている。産業資本概念に即して資本間の関係を根拠づけるという観点からするなら、資本間の関係としての「競争」は現実的には「競争」の自由が保証される「自由競争」か、その自由が破壊された「独占」かのどちらかしかない。歴史的にも、資本制生産が支配的な生産様式として登場するのは、封建遺制としての前期的「独占」を破壊して自らの運動法則を貫徹させ、したがって「競争」の自由を確立することによってであるということ、しかしこの資本制的な「自由競争」は必然的にその制限としての「独占」に転化するというのが、法則的な在り方なのである。だから、「自由競争」が産業資本の運動形態として「もっとも妥当かどうか」という立論そのものが誤っているということは明らかである。

このような立論がなされるのも、つまるところ、「資本主義一般」というものを単なる「共通性」としての「一般」のレベルでしか認識しえず、そのために自ら自己を発展諸段階へと具体化する能動的な主体として把握する見地を欠くからである。その見地を欠落させるなら、「資本主義一般」の十全な規定を与えるために不可欠な特殊的契機としての「自由競争」という形態

は、「資本主義一般」にたいして外的に対立するものとして、偶然的に与えられるしかないのである。いわく、「もっとも妥当な形態」である。

C) 資本主義一般の理論は「枠組」か

本間氏も森岡氏も、事実上、資本主義一般を抽象的普遍として理解する点で共通しているが、このような認識は、資本主義一般の理論から独占資本主義の理論ないし現代資本主義の理論への論理的展開を、理論の「枠組」の拡張と等置する理解に帰結する。

理論の展開ということについて、森岡氏はこう述べている。『資本論』以降の新しい現象のなかには、範疇的には『資本論』で位置が確定している現象もあるが、「この種の現象の研究は、一般にいうところの独占資本主義の時代の現象といえども、資本主義一般の理論に属する」ものもある。だが、「その種の現象を除いたところに残る現象、資本主義一般の基本的属性をなす自由競争に対立する諸現象は、『資本論』の範疇体系の枠内では説明することはできない。それらの現象の基礎をなしているのは自由競争の直接の対立物としての独占」⁴⁵⁾ だからである。「独占」によって規定されるこれらの範疇は「資本主義一般の理論にはとりこめない」⁴⁶⁾。そこで、「『資本論』の理論とその体系は、新しい諸範疇をまえに修正がせまられる。だが、同時にいまその真理性を確認したばかりの『資本論』の理論とその体系は保持されねばならない。この矛盾の解決は、資本主義経済学の有機的体系性を損なわない形での体系の枠の拡大のうちにしかない」⁴⁷⁾。

第一に、現代資本主義論は、『資本論』体系の「枠組」を拡張し、独占資本主義の理論を位置づけることによって確定されるという理解の基礎にある、「普遍と特殊」の区別と同一に関する機械的（＝形式論理的）把握についてである。

独占資本主義論は『資本論』体系の「枠組」の「拡張」として与えられる

45) 同上, 20ページ。

46) 同上, 20～21ページ。

47) 同上, 21ページ。

という認識は、『資本論』において展開される資本主義一般の理論からの展開によって、その一般理論の特殊化として独占資本主義の理論を与えるという認識とは大きく隔っている。『資本論』体系を「枠組」として捉える認識それ自体が、『資本論』において展開される資本主義の一般理論に対する形式論理的な理解を示すものである。このような見地からすれば、資本概念ないし資本の一般的法則に関する理論は、それが自らのうちに特殊な契機を含み、自己を自ら特殊化する具体的普遍として認識されるのではなく、単なる「共通性」として捉えられるにすぎない。したがってその特殊化とは、外延の拡大すなわち「枠組」の拡張によってしか与えられないということになる。典型的な形式論理的理解である。資本一般の理論ないし資本主義一般の理論についてこのような理解が前提されるかぎり、特殊な理論としての独占資本主義の理論は、この一般理論に対しては単に外的・偶然的に対立するだけのものとならざるをえない。

第二に、『資本論』体系から現代資本主義の認識体系への理論的な発展はどのように媒介されるのかという問題についてである。ここにも、「資本主義一般」についての氏の認識が否定的に係わってくる。それは、現実の歴史と認識の歴史（認識史）ないし認識の発展はどのように対応するのかという問題とも係わっている。

『資本論』以後、資本主義一般の理論には「属さない」現象が大量に存在している。それらの現象を「『資本論』体系の枠内」すなわち「資本主義一般の理論にはとりこめない」から、『資本論』の理論体系は「修正をせまられる」。だが、『資本論』の理論と体系は「保持されねばならない」。そこで、「この矛盾は」、「資本主義経済学の有機的体系性を損なわない形で体系の枠の拡大」によって解決するしかない、というのが氏の理解である。

一般に、認識を前進させる動力が、既存の認識（体系）と、そこからはみ出る新たな現実との矛盾であることは言うまでもない。問題は、この「矛盾」を解決して新たな認識を獲得するにいたる論理的な過程とはいかなるものかということであるが、ここに「前進かつ後退」という認識の法則的な過

程が存在する。

新たな現象は分析され、思惟において新たな範疇として反映されるが、その範疇は既存の認識体系のなかに位置づけられることによって、真に範疇として根拠づけられることになる。既存の認識体系によって新たな範疇を根拠づけることは、当該範疇に貫徹する既存の認識体系との同一性を確証することであり、この側面は、それ自体としては、認識の「前進」をしめしている。けれども、当該範疇を根拠づけるということは、一方的な関係ではなく、実は、根拠づけられる当該範疇によって既存の認識体系そのものが根拠づけられる関係、すなわち既存の認識体系そのものが新たな範疇によってその内容をさらに充実させられるという過程でもある。この側面は、明らかに認識全体のなかでは後退の側面を示している。かくして、認識は須く前進かつ後退なのである。資本主義一般の理論からその特殊な発展諸段階の理論への認識の発展も、当然のこととして、かかる前進かつ後退という法則的な過程によって規定されるのである。

『資本論』で展開される資本主義一般の理論は、それからはみ出す新たな現象、すなわち独占資本主義の諸現象に直面して、その制限性が明らかになる。そのかぎりでは、その現象を分析して得られる新たな範疇を「資本主義一般の理論にはとりこめない」と言える。けれども、新たに確定される範疇といえども、それが恣意的・偶然的に位置づけられるのではなく、法則的に解明されるべきものだとするれば、依然として資本主義の法則的連関のなかで捉えられねばならないのであって、それは、当該範疇と『資本論』で確定された資本主義一般の理論との同一性を確証すること以外にはない。すなわち、独占資本主義の諸現象を反映する新たな範疇は、「資本主義一般の理論」によって根拠づけられ、「資本主義一般」との同一性を確証されることによって、その法則的・必然的な位置が確定される。それは、「資本主義一般」の理論が、その貫徹する外延を拡大する過程でもある。ところが、この過程は単に一方的に新たな範疇が根拠づけられる過程ではなく、当該範疇によって「資本主義一般」の諸範疇を根拠づける過程でもある。それは、既存の認識

体系としての「資本主義一般」の理論を新たな範疇によって充実する過程であり、この側面からすれば、「資本主義一般」の内包を充実する過程にはかならない。かくして、「資本主義一般」の理論と新たな現実としての独占資本主義の諸現象との矛盾によって、総体としての認識は前進するが、その過程は、「資本主義一般」の理論がその外延を拡大することによってその内包をさらに特殊的な内容によって充実する過程なのであって、なんら「資本主義一般」の理論と無縁な理論的営みの過程ではないということである。

方法論的には、この観点を欠くために、氏にあっては、立論そのものが「機械的」（＝外的なものの結合）な性格をもっている。「資本主義一般」の理論に対立する諸現象との矛盾が生じたとき、その諸現象を反映する範疇を資本主義一般の理論の中に「とりこめるか否か」と立論し、「資本主義一般の理論は修正を迫られるが、修正はできない」と考え、それなら、「資本主義一般の体系を修正するのではなく、その枠の拡大」によって「矛盾は解決される」のではないかと考える。

ここには、そもそも「資本主義一般」の理論を一旦確立されたらそのまま不変の体系としてとどまる「枠組」として理解する、「資本主義一般の理論」の機械的な理解がある。このような理解が前提となるから、新たな現象との矛盾によって、「資本主義一般」の理論を「修正すべきか否か」という立論にならざるをえないし、また「資本主義一般の理論」の体系は「保持されねばならない」といったように、理論体系の能動的な理解ではなく、受動的な位置づけにならざるをえない。そして、最後には、「資本主義一般の理論」体系そのものの発展という見地ではなく、「枠組」そのものを拡張することによって「矛盾」を解決するといった発想が登場することになる。「資本主義一般の理論」の体系という不変の「枠組」は前提だから、新たな現象を反映する範疇体系は、「資本主義一般の枠組」とは別に、拡張された「枠組」のなかに取り込む以外にはないということである。そうすると、結果としては、「資本主義一般の理論」の「枠組」と、その「枠組」とは機械的に関係するだけの拡張された「枠組」に取り込まれた範疇体系とが併存するという

ことにならざるをえない。ここに、「資本主義一般の理論」に対する氏の認識の致命的とも言える欠陥がある。

事物の有機性や発展を捉える理論体系を「枠組」という機械的・力学的関係を反映する範疇によって捉える氏は、理論体系が豊かになることを、「発展」ではなく、「拡大」と表現する。「発展」とは、言うまでもなく、即自的なものが対自的なものに、潜在的なものが顕在的なものに転化する関係を捉える普遍のカテゴリーである。認識もまた、既存の認識と新たな認識が「前進かつ後退」という関係として捉えられるように、「発展」関係において捉えられるべきものであって、単なる体系の「拡大」として捉えられるものではない。「拡大」という外延の量的規定性に係わるだけのカテゴリーによって認識の発展を捉えようとするところに、「資本主義一般の理論」に関する氏の理解の特徴が示される。

もっとも、このような理論体系に関する氏の機械的な理解は、同時に現実の資本主義そのものに関する機械的な理解を前提としてもっているようである。「商品生産や自由競争という資本主義体系の一般的枠組……」⁴⁸⁾ などという理解は、その端的な例である。「資本主義一般の範疇体系を損なうことなく、そのうえに独占資本主義に独自の諸範疇を析出し」などというのも、同一の理解の「枠組」のなかにある。「資本主義一般の理論」を「損なわずに」という発想は、一方で、新たな資本主義の発展諸段階に固有の諸条件が「資本主義一般」によって生み出されたものとしてではなく、それとは「無縁」な、外的に与えられるものとして考えられているということであり、他方で、したがって、「資本主義一般」はこれら「新たな諸条件」の登場によって「損なわれる」ところの「受動的存在」として考えられているということである。このような資本主義観の観念論的な性格については、繰り返し述べて来た。資本主義一般の理論の「理論体系の枠組の拡大」という発想も同工異曲である。

48) 同上, 27ページ。

D) 資本主義一般と独占資本主義の関係と「土台」「上部構造」

資本主義一般を抽象的普遍と捉える論者は、資本主義一般と独占資本主義ないし帝国主義との関係を「土台」と「上部構造」の関係として捉えるレーニンの解釈においても、それらを資本主義一般と独占資本主義の実在的な「併存」関係として解釈するということになる。

関下稔氏は、「ロシア社会民主党の綱領改正問題」（1917年）でのレーニンの主張を検討し、次のようにその論点を総括している。第一、資本主義一般の基本的特質を述べた旧綱領に帝国主義の特質を付け加えることは機械的ではない。というのも、それが現実の資本主義の発展だからである⁴⁹⁾。第二、帝国主義になっても資本主義一般の基本的特質は変化しない、帝国主義は資本主義の「発展の継続」であり、その最高の発展段階⁵⁰⁾である。第三、帝国主義になっても資本主義の基本的特質は変化せずに残っているのだから、現実存在しているのは、資本主義の基本的特質と帝国主義の特質との両者である。すなわち、資本主義と商品生産一般との基本的特質である自由競争のなかから、その対立物として独占が現れたが、この独占は自由競争を排除せず、自由競争のうえにこれと並んで存在している⁵¹⁾。そして、第四に、純粹帝国主義は誤りであり、存在するのは資本主義の基本的特質と帝国主義の基本的特質の両者である。単に両者が並列的に存在しているのではなく、帝国主義は古い資本主義の上部構造であり、帝国主義の古い資本主義に対する支配である⁵²⁾。レーニンも、「……存在するものは、幾多の分野で成長した古い資本主義である。その傾向はもっぱら帝国主義的なものである。根本的な問題は、もっぱら帝国主義の見地からのみ検討することができる」⁵³⁾と述べている。

第一に、帝国主義段階においては、資本主義の基本的特質と帝国主義の特質とが存在しているという認識についてである。これは資本主義一般と資本

49) 関下稔『現代世界経済論』（有斐閣、1986年）42ページ。

50) 同上、42～43ページ。

51) 同上、43ページ。

52) 同上、44ページ。

主義の発展段階＝帝国主義との関係という問題であり、より普遍的な問題としては普遍と特殊の区別と同一という問題である。

一般的に言えば、資本主義一般と帝国主義との関係は次のように幾つかの側面をもっている。第一に、資本主義一般は独占資本主義段階を含む、それ以後の発展段階を胚胎する具体的普遍としての一般（＝普遍）である、第二に、資本主義一般は単なる抽象ではなくそれ自体ひとつの特殊的、歴史的な存在としての自由競争段階の資本主義である、第三に、帝国主義は資本主義一般の特殊的な発展段階だが、資本主義一般から発展したのだからそれ自体資本主義一般である。第四に、資本主義一般は特殊的な発展段階の総体としてしか存在しない。

これらの諸側面によって、資本主義一般と帝国主義との関係は把握されるのだから、資本主義一般の基本的特質と帝国主義の特質の両者が存在しているなどという認識は、帝国主義の認識としては極めて曖昧かつ不正確な認識であって、両者が存在するという関係それ自体を論理的に媒介することが改めて問題とされねばならないような水準の認識である。現実的に存在するのは資本主義一般と帝国主義の両者だというのが、それは両者が「自立的」に関係し合っているということを意味しているのか。仮にそうだとすれば資本主義一般それ自体が存在することはないのだから、自由競争資本主義と独占資本主義とが併存しているということになる。しかし、現実的な関係として、自由競争資本主義と独占資本主義が実在的に関係しあうというのは、明らかに論理的撞着である。なぜなら自由競争の否定こそ独占だからである。

かくして、資本主義一般と帝国主義との両者が存在するといっても、両者が実在的に存在するということではない。現実的に存在するのは帝国主義＝独占資本主義だけであって、この独占資本主義といえども資本主義一般の発展である以上、そこに資本主義一般が普遍的に貫徹するという意味で、すなわち独占資本主義という形態をとって資本主義一般が存在するという意味にお

53) レーニン「ロシア社会民主党の綱領改正問題」(レーニン『全集』第29巻) 245ページ。

いてのみ、帝国主義とともに資本主義一般が存在するといえるだけなのである。

現実的に存在するのは自由競争資本主義か独占資本主義であり、したがって実在的な資本主義はいずれも特殊的な形態のもとにある資本主義である。けれども、これらの実在的な資本主義が特殊的な形態だというのは資本主義一般に照らしてそうなのだから、いずれも資本主義一般であるというのも事実である。かくして、資本主義の実在的な姿態としての自由競争資本主義も独占資本主義も資本主義一般の特殊的な形態であり、そういう観点からすれば、いずれの資本主義も資本主義一般だということになる。実在的にはすべてのものは特殊なものであるが、それらは一般的なものの特殊化としてのみ特殊なものなのだから、一般的なものと特殊なものとの統一としてのみ存在しているということである。

第二に、見られるように、関下氏は、資本主義の基本的特質と帝国主義の特質が「存在する」として、両者の関係を、古い資本主義と帝国主義の関係として説明している。帝国主義は古い資本主義の「上部構造」であり、帝国主義によって古い資本主義は支配される関係にあるというのである。関下氏が「存在する」ということをいかなる水準で理解しているのかは定かでないが、ここでの説明の仕方を見ると、「存在する」ということを実在性をもって存在するということと等置しているのは間違いない。というより、両者を論理的に区別しえていないというべきかもしれない。いずれにしても、「存在する」ということを実在的な関係と同一視することによって、関下氏は重大な誤りを犯かすことになる。すなわち、こうである。支配するという関係は、実在的なものの関係であって、自立的に存立する二つのものの関係である。資本主義一般が上部構造としての帝国主義によって支配されるのだから、両者は実在的に存在しているという認識が前提となっていることは間違いない。とすれば、それ自体としては一つの抽象にすぎない「資本主義一般」がそれ自体として実在するとともに、資本主義一般の一つの形態である帝国主義が、資本主義一般に対する支配者として存在するということになる。このような

関係は絶対に存在しないし、表象することさえできない。

一体、関下氏はレーニンの言う「上部構造」をどのように理解しているのか。「上部構造」という機械的・力学的な関係の支配する建築物の構造から援用されるカテゴリーによって、有機性の貫徹する経済関係を捉えるのだから、レーニンがそれを援用する際にも、必ず留保があるのであり、ましてやレーニンの解釈を行う場合には、「上部構造」というカテゴリーそれ自体の検討を行うことなく、無批判に援用してはならない。社会構成体の経済的土台に対する上部構造とも違って、それ自体ひとつの有機的全体として存在する経済的関係それ自体のなかに「上部構造」というカテゴリーによって把握すべき関係を設定するからには、当然のこととして土台ないし下部構造として把握される関係を設定しているのだが、果して経済関係を把握するカテゴリーとして上部構造と土台・下部構造というカテゴリーは適当なのかどうか、これらのカテゴリーによっては十全に表現しえない関係があるすればそれは何なのか、これらのことが検討されねばならないのである。

上部構造として表現される帝国主義＝独占資本主義の下部構造は資本主義一般＝古い資本主義だというのが、帝国主義と資本主義一般との関係は、そもそも上部構造が土台に対して有する外的・偶然的な関係とは異なり、一方が他方に発展するという必然性をもった関係である。資本主義一般が自ら帝国主義＝独占資本主義という発展段階＝形態に至って、なお資本主義それ自体＝一般が帝国主義の土台として実在するなどというのは、発展＝必然的な関係とは何かということについての無理解以外の何物でもない。レーニンが帝国主義を古い資本主義の上に立つ上部構造だと規定し、しかも帝国主義という上部構造を破壊するなら古い資本主義が現れると言っているのは、帝国主義とは資本主義一般の発展段階であり、帝国主義という形態をとった資本主義だということを象徴的に表現せんがためなのである。帝国主義は独占資本主義なのであり、資本主義一般の本質となんら異なるものではなく、資本主義一般の発展によって必然的に生まれた資本主義一般の特殊な発展段階だということ表現しているにすぎない。

したがって、レーニンが言うとおりの、帝国主義という形態を破壊すれば、この形態をとっていた資本主義一般が現れるのは当然なのだ。この関係を実在的に資本主義一般の土台の上に帝国主義という上部構造が存在する関係と理解し、帝国主義という上部構造を破壊すると土台としての資本主義一般＝古い資本主義が現れると理解するなら、それは誤りである。そもそも、上部構造によって規定されない土台はないのだから、帝国主義という上部構造を破壊してもそこに資本主義一般という土台が純粹に現れるなどということは絶対にないのである。

帝国主義を上部構造と規定するレーニンの主張を無批判に援用するだけの論者は、そもそもレーニンが、「存在するのは……帝国主義にまで成長した古い資本主義である」と言っていることをどのように理解するのか。実在的には帝国主義＝独占資本主義しかないと、レーニンは言っているのであって、土台としての資本主義一般＝古い資本主義と上部構造としての帝国主義が実在するなどと言っているのではないのである。

③ 「競争と独占」の区別と同一

資本主義一般の理論と独占資本主義の理論の関係を把握するという課題に即して、しばしば論者によってとりあげられるのは、競争と独占の区別と同一という問題である。この問題については、他の機会に改めて検討することとして、ここでは、やや異なる観点からこの問題を取り上げてみる。すなわち、平均利潤法則の「失効」問題についてである。独占資本主義のもとで平均利潤法則は貫徹しているのかそれとも失効しているのかということをめぐる議論は、一般に法則というものをどのように考えるのか、特殊的には独占と競争の関係を科学的に把握するとはどういうことか、という問題に関して、論者の基本的立場を露呈させることになるからである。

平均利潤法則の「失効」問題について方法論上の混乱を露呈する森岡氏の見解をとりあげることにする。森岡氏も、「全部門に一般的に妥当する平均利潤率の成立とそれぞれの部門における生産価格の成立」について主張し、

そのかぎりでは、平均利潤法則とは、部門特殊利潤率の形成をモメントとする部門間利潤率の均等化傾向によって媒介される一般的利潤率の形成を内容とすることについては認めているかに見える。けれども、そうではない。平均利潤法則は全部門に一般的に妥当する関係だということを述べているにも拘らず、独占価格の成立に言及するや、平均利潤法則についての氏の理解がいかに曖昧なものであるかを露呈する。

氏によれば、独占価格は、まず「平均利潤法則の作用が停止する部面において成立」するのだが、そうすると、平均利潤法則とは全部門に一般的に妥当するのではなく、平均利潤法則の作用が「停止する部面」と停止せずに貫徹する部面とが併存しつづけるということを主張することになる。平均利潤法則を自由競争資本主義に貫徹する一般的法則として把握するということは、それを自由競争段階における剰余価値法則の貫徹形態として把握するということであり、したがって、自由競争段階の資本主義の全経済機構を規制する原理として把握するということである。ところで、独占価格の成立とは、すでに自由競争が存在せず、というよりその関係が消失して独占という形態での資本間関係が支配的な関係として登場しているということを反映する価格関係なのだから、独占価格の成立について論ずる際には、自由競争資本主義を前提する法則としての平均利潤法則については、それがすでに失効しているということを前提として議論を組み立てなければならない。

独占段階の資本主義の生産関係を反映する価格形態としての独占価格が成立するのは、平均利潤法則の失効する部面においてであるという議論は、他方に平均利潤法則の失効しない部面が存在しつづけて、そこでは独占価格の規制から免れた価格現象が存在しているという理解を前提している。独占資本主義のもとでも自由競争資本主義を規定する一般法則としての平均利潤法則が失効せずに作用している「部面」が存在しつづけるということは、独占資本主義を規定する法則が自由競争資本主義を規定する法則のもとに組み込まれて下位に位置する部面が存在するということを認めることであり、それはすなわち独占資本主義を規定する法則が、独占段階における社会的総資本

の関係を規定する法則として貫徹することを否定するということである。それはひるがえって、自由競争資本主義を規定する一般的な法則としての平均利潤法則なるものも、実は、全経済機構に貫徹する普遍的な法則としてではなく、経済機構の部分に貫徹する法則として把握されることを意味する。平均利潤法則の貫徹する部面と失効する部面とを認めるということは、その法則が部分的な効力しかもたないということを経験することだからである。

平均利潤法則が、独占資本主義のもとでも作用する部面と作用しない部面とに別れるという考え方は、平均利潤法則というものの理解そのものが誤っているということであるとともに、競争と独占の関係についての理解が誤っているということも関係している。

平均利潤法則は自由競争の支配する資本主義を規制する法則だから、歴史的発生史を見れば、その法則の作用する経済部面は「自由競争の支配が完成していく度合に応じて拡大」したという立論が多い。封建的諸関係すなわち前期的独占の諸制限を突破し、資本支配の前提としての自由競争的諸関係を確立することは一挙に突然成し遂げられる事ではなく、徐々に成し遂げられて行ったことだから、自由競争の成立を歴史的に観察するかぎり、それは次第次第に完成し、それに応じて平均利潤法則の貫徹する圏域が拡大して行ったというのはその通りであるという見解も多い。平均利潤法則の「歴史的な始点」をこのようにして承認する見解は、同様に「歴史的な終点」についても、自由競争の貫徹が制約されていく度合に応じて平均利潤法則の貫徹する領域が縮小されていくというように考える。かくして、「独占資本主義のもとでも平均利潤法則が貫徹するのは価格が固定されない不断の変動のなかにあり、特殊的利潤率が動揺にさらされる競争的諸部門においてである」といったことが平然と語られることになる。

森岡氏に典型的に見られるこの種の法則観のもつ問題は多い。第一に、平均利潤法則の貫徹を解明する論理と法則そのものの歴史の解明との混同という方法上の誤りであり、第二に、平均利潤法則の「始点」と「終点」を、平均利潤法則それ自体の作用領域の「拡大」と「縮小」と同一視するという実

証主義的誤りであり、それは、平均利潤法則の「失効」問題を作用領域の大小に解消する誤りと表裏をなしており、第三に、そのことによって、「前期的独占」と資本制的独占とを論理的に等置して扱い、一方は資本制的生産様式によって克服されるべき関係であり、他方の独占は、資本制的生産様式の発展段階において登場する関係として論理的には全く異なるレベルの問題であることが看過される、という誤りであり、第四に、資本主義の発展諸段階を理論的に把握する場合、それぞれの段階を規定する特殊な法則の解明とそれら法則間の必然的な連関を捉えるという方法によらずに、平均利潤法則それ自体の作用領域の「拡大」ないし「縮小」といった法則の量的な解釈によって理解しようとする誤った法則観であり、さらに第五に、平均利潤法則の「終点」を平均利潤法則の作用領域の「縮小」と同一視するなら、それはすなわち独占資本主義のもとでの規定的な法則としての独占利潤の法則を「自由競争」資本主義の規定的な法則としての平均利潤法則のレベルに引き下げることになるという誤りである。

資本主義一般の法則としての平均利潤法則を明らかにするには、完成した資本制的生産様式を前提することで足りるのであって、この平均利潤法則が「歴史的に」如何にして登場したのか、歴史的に如何にして失効していくのか、ということは、平均利潤法則の解明そのものとはことなる諸条件によって媒介される歴史的過程についての一連の考察が必要となる。その歴史的発生と終点を明らかにするには、当該法則の論理的な解明とはことなる歴史的な諸条件の分析によらなければならない。このことは、平均利潤法則を捉える方法論上の核心である。

ところが、平均利潤法則についての不十分な理解を前提する論者の多くは、当該法則の歴史的な始点と終点を直ちに「自由競争」の貫徹する領域＝圏域の歴史的「拡大」と「縮小」という条件と等置して理解し、結果として、その領域の大小はあるけれども「自由競争」の作用する領域があるかぎり平均利潤法則も作用しつづけるという結論を共有する。「自由競争」の領域が次第に「拡大」して全部面を覆い、時とともに次第にその作用する領域を「縮

小」していく。平均利潤法則はそれに応じて、作用する領域を拡大し、完成し、縮小していく。論理と歴史との典型的な混同である。平均利潤法則とは自由競争が資本間関係を規定する原理として完成した資本主義、すなわちすべての資本がすべての他の資本にたいして敵対的に関係する「自由」を確保し、結果として投下資本の大きさに応じて社会的な総剰余価値の平均的な配分にあずかる関係が成立している資本制的生産様式を規定する法則であるから、「自由競争」の作用が制限されるとともにその作用を停止する法則であって、「自由競争」の作用領域とともに「拡大」したり「縮小」したりするような量的大小のレベルで把握されるべき法則では絶対でない。

「自由競争」の支配する資本主義とは、自己の足でたつ完成した生産様式としての資本制的生産様式の支配する資本主義であり、平均利潤法則とは、この資本主義に貫徹する法則である。資本主義の解剖学によって明らかにされるこの法則が、「歴史的に」どのように発生したかということは、この法則を媒介する「自由競争」の作用する領域がどのように「拡大」してきたかという問題として提起されるものではない。その「歴史的発生史」は、封建的生産様式から資本制的生産様式への転換過程の全機構的解明によって媒介されるべき性格のものなのであって、完成した「自由競争」の支配する資本制的生産様式に支配する平均利潤法則の側から振り返って、その作用領域の「拡大」過程と同一視されるものではないのである。平均利潤法則だけを前提してその「歴史的発生史」について言及しようとするれば、資本制的生産様式の完成に至る以前、「剰余価値法則」は平均利潤法則という形態ではなく、部門ごとに異なる利潤率が支配するという形態でしか貫徹しえなかったということである。

平均利潤法則は「自由競争」領域が次第に「拡大」していくのに応じて作用する領域を拡大して行ったという理解は、平均利潤法則の「歴史的始点」に関する認識として正当な認識であるかに見えるけれども、それは上に述べた理由からして誤っているだけではない。このような理解に立つなら、「始点」において克服されるべき「封建的・前期的独占」と「終点」において自

由競争そのものを克服する「独占」とを論理的には等価とすることになるという点でも誤っている。

独占段階においては、平均利潤法則は失効するということを、平均利潤法則の厳密な分析によってはじめて明らかにしたのは見田氏であったが、森岡氏は、平均利潤法則に関する見田氏の主張について、それを見田氏の混乱によるものとして批判している。はたして混乱しているのは、見田氏か森岡氏か。森岡氏が見田氏を批判するのは、次のような内容においてである。

「それ自体が競争とは別の、そして競争に対立する社会的生産における權威であり強制力である資本主義的独占の経済的実現としての独占利潤およびそれに含まれる独占的超過利潤は資本主義にとって本質的な剰余価値生産に基礎をもっているが、しかし、剰余価値法則の現象形態ではない。(このことはある意味では、資本主義的生産＝剰余価値法則は、商品生産＝価値法則に基礎をもっているが、前者は後者の基礎ではない、ということと類似した関係にある。人はしばしば剰余価値生産の基礎上での価値法則の現象形態が生産価格法則＝平均利潤率の法則であることから、剰余価値法則まで価値法則の現象形態としてしまいがちである。) この点では、見田石介氏が平均利潤の法則と剰余価値法則との区別を問題にして、『剰余価値法則、利潤の一般的法則、これらはただ資本一般と労働一般との関係を表している。あるいは個々の資本と労働の一般的な関係を示す法則であって、少しも資本家のあいだの相互関係にふれる法則あるいはカテゴリーではない』(「平均利潤法則について」) というのは正しい。しかし、見田氏が、同じ論文で、『剰余価値法則は、平均利潤という形態をとることをやめて、最大限利潤の形態をとることになった。資本家相互の平等の関係、兄弟的、共産主義的關係は、もはやその各部面にかかわりのない一般的な不平等、支配と服従、収奪との関係にとって代わられた』というのは、……さきの剰余価値法則についての事物の説明にも反するといえる」⁵⁴⁾。

ここには二つの大きな問題がある。第一は、剰余価値法則と価値法則の関係を剰余価値法則と利潤法則の関係と等置するという混乱であり、第二は、

剰余価値法則と利潤法則の関係について見田石介氏は混乱していたかという問題である。

第一の問題について検討する。氏によれば、独占利潤が剰余価値生産に「基礎」をもっているからといって、独占利潤法則を剰余価値法則の現象形態として把握してはならない。それは、剰余価値生産＝剰余価値法則は商品生産＝価値法則を基礎としているが商品生産の現象形態ではないというのと「類似」しているからだというのである。商品生産が資本制的生産の「基礎」であり、したがって基礎としての商品生産は自らを展開して資本制的生産様式に転化しないというのは正しい。現象とは本質の映現であるという見地からすれば、商品生産は資本制的生産の「基礎」ではあっても「実体としての本質」とはいえないし、ましてや主体としての本質でもないからである。商品生産が自己の現象形態として資本制的生産＝剰余価値をもつとは言えない。けれども、このことは、独占利潤の法則が剰余価値生産の現象形態ではないということをなんら根拠づけるものではない。資本制的生産様式の確立を前提とすれば、そこで問題になるのは、主体としての資本がその本性としての剰余価値法則をどのように貫徹するのか、自己の本性を貫徹する諸形態とは如何なるものか、ということである。そこでは、剰余価値法則とその諸形態との同一性を把握することこそ課題なのである。

独占利潤法則とは「利潤法則」の形態であることを否定する者はいないであろう。とすれば、利潤法則とは剰余価値法則の現象形態なのだから、独占利潤法則が剰余価値法則の現象形態だというのは、自明の前提である。剰余価値法則を価値法則の現象形態とする議論はさておき、生産価格法則は単に価値法則の現象形態であるに止まらず、生産価格を構成する平均利潤すなわち剰余価値の社会的な配分法則の産物でもあるという観点からすれば、それは剰余価値法則の現象形態でもあるのであって、なにか、現象というものを単一の本質の現れとしてだけ見なければならないという「本質—現象」観そのものが問題なのである。現象とは、そもそも、現象世界として、無数の現

存在の間の根拠づけるものと根拠づけられるものとの関係の世界なのであって、根拠としての本質の数だけ現象形態があってもなんら不思議ではないし、形態という以上そもそも限定された関係のなかにあるということである。

かくして、独占利潤法則が剰余価値法則の現象形態であるのは自明のことであり、それを否定するなら、そもそも独占利潤とは何を実体的基礎として成立する関係であるのかが全く不明瞭となる。

第二の問題についてである。見田石介氏の法則観に対する無媒介的な「批判」であるが、森岡氏の法則観が、ここにはしなくも露呈される。要は、見田石介氏は、「剰余価値法則、利潤の一般的法則」それ自体はなんら資本家の「相互関係にふれる法則」（傍点は引用者）ではないと言いながら、他方で、「剰余価値法則」が資本家間の関係をあらわす法則としての「平均利潤という形態」をとるとか、その形態をやめて「最大限利潤法則」の形態をとるに至るというように言うのは、論理的撞着ではないかというのである。はたして、そうであろうか。

剰余価値法則が直接に表す内容は、資本を資本たらしめる自己増殖の源泉、必要労働を超過する剰余労働を無償で取得（＝搾取）する関係それ自体である。この関係は、個々の資本と労働の一般的な関係—いうまでもなく、それは総資本と総労働との関係を「含む」—を前提することによって明らかにされるのだから、総資本間の関係が、事態を純粹に考察するには攪乱的な関係として捨象されるのは当然である。剰余価値法則の転化形態としての利潤一般の法則についても同様である。見田氏が、剰余価値法則や利潤一般の法則は、「資本家の間の相互関係にふれる法則あるいはカテゴリーではない」と述べるのは、かかる方法論上の含意においてであることは言うまでもない。

森岡氏の見田説批判との関連で重要なのは、見田氏は、剰余価値法則は資本家間の関係に「ふれる法則ではない」と述べているのであって、けっして剰余価値法則が資本家間の関係を「含まない法則」だと述べているのではないということである。「資本一般と労働一般との関係」、「個々の資本と労働の一般的な関係」という場合、それが総資本と総労働との関係を「含む」、した

がって総資本間の関係を「含む」ものであることは、弁証法的論理学における論理的展開というものについての特別な訓練がなくとも、常識的に理解できることである。抽象的カテゴリーはより具体的なカテゴリーを「含む」からこそ、その被前提性を止揚すべく論理は展開されるのである。マルクスは、「資本概念は世界市場を含む」と言うのである。

かくして、生産部面を越えた資本間の競争、社会的総剰余価値の配分をめぐる社会的総資本の関係は、そもそも、総資本間の関係を「含む」剰余価値法則ないし利潤一般の法則からの展開として、それら一般的法則の特殊な形態として把握されることになる。社会的総資本による社会的総剰余価値の分割という総資本間の相互関係を、直接的には資本間の相互関係に「ふれる」ことのない、剰余価値法則・利潤一般の法則からの展開として明らかにする見田氏の見解は、なんら、論理的撞着ではない。見田氏の見解が論理的に撞着しているなら、価値論を基礎として生産価格論を展開するマルクスの見解も撞着しているということになるのではないのか。森岡氏が、見田氏の平均利潤法則理解に論理的撞着を発見するとすれば、それは、森岡氏が、マルクスの概念的展開の方法について理解しておらず、したがってこの方法によって平均利潤法則の法則としての特殊性を明らかにする見田氏の見解を評価しきれていないからである。

資本主義一般に貫徹する法則と理解されていた平均利潤法則を、さらに根源的な法則によって根拠づけ、その一つの形態にすぎないとしたところに見田氏の発見の意義があったのである。ところが、この肝腎の点が、森岡氏にあっては全く理解されていない。見田氏のように、平均利潤法則を利潤一般の法則の一つの形態として把握する限り、独占段階における利潤法則の新たな形態が、それ自体として問題とされるのだが、利潤一般の法則と平均利潤法則の区別、実体と形態としてのそれらの区別をなしえない森岡氏にあっては、他の論者同様、独占利潤法則は平均利潤法則の形態変化として把握される以外にない。平均利潤法則こそ資本主義一般に貫徹する利潤法則一般だという堅い主観的確信によっている論者は、必然的に平均利潤法則の貫徹の

形態として独占利潤法則を展開しなければならないのだから、独占資本主義のもとでもかならず平均利潤法則とそれを媒介する「自由競争」とが実在性をもって貫徹するということを主張することになる。法則観として見た場合、ここにこれらの論者の致命的欠陥がある。

(すずき・けん／経済学部助教授／1990. 4. 24受理)